

第20巻発刊にあたって

富山県農村医学研究会会長 豊田 文一

昭和45年、富山県農村医学研究会誌を創刊し、農村の健康管理に関する研究に会員各位のご努力により多くの業績を発表され、今日に至ったことに対し深甚なる謝意を表する。

そもそも本県における農村保健の問題は、戦時中に遡る。昭和12年日中事変を発端とし、壮丁は召集され戦野にあり、農村を守るものは高齢者、あるいは婦女子で、これらに耕作は委ねられ、さらに食糧の強制供出が加わり、栄養の摂取も制限せざるをえない状態におかれた。しかも疲労も加わり、いわゆる農夫症と称せられる症候群も各所より報告されるに至った。

私は昭和15年、金沢大学医学部耳鼻咽喉科学教室より当時の産業組合第1病院（現厚生連高岡病院）へ赴任し、専門領域の診療はもとより、この病院の設立の目的は、農民の健康管理と診療であった。ことにこの病院の創設者、高島開作氏は、農村医療と健康管理について督励された。そのため医師の過疎地帯へ重点をおき、荷物を満載した木炭トラックの上に乗し、ことに五箇山の健診などには現在廃道となっている羊腸たる一車線の急坂を喘ぎながら登行し、幾度か肝をつぶされながら目的地に達した。

この農村の健康管理で、私の記憶に蘇えるのは射水郡作道村（現在新湊市）診療所の西田重衛氏である。今は乾田化されているが、当時は湿田地帯で、腰まで没して耕作せねばならなかった。そのためかこの地はウイルス

病の淫浸地であり、かつその後提唱された農夫症の多発地帯でもあった。この西田氏の医学的研究とその示唆により湿田地帯の乾田化が進められ、健康な村作りに貢献されたことは、私の記憶に蘇える。また高島開作氏の居住地松沢村（現小矢部市）へも幾度か各科の総合検診に出向いた。

健康と環境、ただ病院で来診する患者だけを対象としていては実証的研究は出来ない。医学、とくに臨床医学を志さずものは、環境因子を念頭にしなければ真の医療とはいえない。

私は産組病院着任当時、能登の県境熊無、速川村（現氷見市）に佝僂病の多発していることを知り、数日間横山村長宅に泊まり、個々の家を歴訪調査を行ない、日光紫外線の不足と摂取栄養素の不足に起因すると推測した。（本誌第3巻に報告）。

今年、富山県医療計画が策定され、医療網が整備されることとなった。しかし県全域にわたり農村の健康管理の推進には色々の隘路があり、多年にわたる農村の健康管理にたずさわられた会員各位の協力をえなければ到底その効果はえられない。

私どもの研究目的は、農村の健康管理であり、疾病を未然に防止し、農民の健康を守るためにも、この研究をさらに推進して頂きたい。

以上私見を連らねて披瀝したが、さらに新しい構想を打ち立て、研究会の発展にご協力されんことをお願いする次第である。